

師の説になづまざる事

おのれ古典を説くに、師の説と違へること多く、師の説のわるきことあるをば、わきまへ言ふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、「のちによき考への出で来たらむには、必ずしも師の説に違ふとて、な憚りそ。」となむ教へられし。こはいと尊き教へにて、わが師の世に優れ給へる一つなり。

おほかた、古を考ふること、さらに一人二人の力もて、ことごとくあきらめ尽くすべくもあらず。また、よき人の説ならむからに、多くの中には、誤りもなかなからむ。必ずわるきことも混じらではえあらず。そのおのが心には、今は古の心ことごとく明らかなり、これをおきてはあるべくもあらず、と思ひ定めたることも、思ひのほかにも、また人の異なるよき考へも出で来るわざなり。あまたの手を経るまにまに、先々の考への上を、なほよく考へ究むるからに、次々に詳しくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よき悪しきを言はず、ひたぶるに古きを守るは、学問の道には言ふかひなきわざなり。

またおのが師などのわるきことを言ひあらはすは、いとも畏くはあれど、それも言はざれば、世の学者その説に惑ひて、長くよきを知る期なし。師の説なりとして、わるきを知りながら、言はずつつみ隠して、よざまにつくろひをらむは、ただ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。

【口語訳】

私が古代の書物を解釈するのに、師の説と違っていることが多く、師の説のよろしくないところがあるのを、はっきりと認めて論ずることも多くあることを、きわめてもつてのほかのことだと思ふ人が多くいるようであるが、これはそのままわが師のお心であつて、(師が)いつも教えなされたことは、「のちによい考えが生まれてきたような場合には、決して師の説と異なる(から)といつて、遠慮してはいけない。」と教えなされた。これは大変貴い教えであつて、わが師が実に優れていらつしやる点の一つである。

だいたい、古代について考えることは、決して一人や二人の(学者の)力によつて、ことごとく解明し尽くすことができないはずもない。また、優れた学者の説であるからといつて、(その学者の)多くの(説の)中には、誤りもどうしてないことがあるうか、いや、あるはずである。必ずよくないことも混じらないわけにはいかない。その人自身の心では、「今は古代の精神はすべて明らかである。この説を差しおいては(他によい説が)あるはずはない。」と思ひ至つたことでも、予想外に、別の誰かの異なる優れた考えも出てくるものである。多くの人の研究が重ねられるにつれて、以前の(学者の)考えの上のことを、なおもよく考え究めるので、次々と詳しくなつていくものなので、師の説だからといつて、必ずこだわり守るべきものでもない。正しいか誤つているかを問題にせず、ひたすら古い説を守るのは、学問の道にとつてはつまらないことである。

また自分の師などのよくない点を公表することは、たいそう畏れ多いことではあるが、それも言わないと、世の学者はその説に迷つて、長い間正しい説を知る時がない。師の説であるからといつて、誤りを知りながら、公表せずに包み隠して、体裁がよいように取り繕つているようなことは、ただ師だけを尊敬して、学問の道(のこと)を思つていないのである。